

私の見たブラジルの農業(第5回)

中南米技術協力専門家(元岡山県専門技術員)

田中文哉

パンタナール(大湿地)

○どこにあるのかパンタナール○

皆さん南アメリカの地図をひらいて下さい。

アルゼンチンのブエノスアイレスのところに注いでいる大河が、アマゾン河についで南米第二の大流ラプラタ河(銀の川)です。そのラプラタ河の上流はパラグアイ国の真中をゆったりと流れていますが、ここまできるとパラグアイ川と呼ばれ、さらにマツグロツソ州とボリビアとの国境を北上していきます。マツグロツソ州にこの川が入ったところにコロンバという街があります。ここでタクアリ川の支流が分かれることとなりますが、もうすこし北にのぼると、本流はさらにクヤバ川の支流とボリビアに流れ込む支流との3つの川に分岐します。

この3つの主な川、パラグアイ川、クヤバ川、タクアリ川の合流点を中心に低湿地を作りあげているのが、いわゆるパンタナールと呼ばれる大湿地、大沼地です。このマツグロツソ州の面積の約13パーセント(また20パーセントともいわれています)を占めている広大なものです。

○本州と四国を合せた 大きさのパンタナール○

ブラジルを訪れるすべての人々は、みんなこのパンタナールを話題にしています。それほど、ブラジルでは有名なのです。今日は、このパンタナールの不思議なお話をいたしましょう。

パンタナールの位置は、説明したように、パラグアイ川にそそぐ3つの支流が合流していて、南はコロンバという街のやや南方から北はカセレス街の北方にまでのびており、東は州の約半端から、西はボリビアの国境をはるかに越えています。

マツグロツソ州にある大湿地の面積は16万平方キロメートル(1613万町歩)ともいっているし、25万平方キロメートル(2521万町歩)ともいっていま



す。25万平方キロメートルの広さは、日本の本州と四国を加えた面積にはほぼ匹敵します。標高は低いところで110メートル、高いところで130メートルくらいですから、標高の差は見たところまったく感じられません。むしろ無いといってもよいくらいです。まったく一望千里の水平線に見えます。

このあいだ、お隣の県(広島県)の尾道市立植物園の村田弘之園長が友人といっしょにコロンバからクヤバまで、折からの雨季で満々と水をたたえたパラグアイ川~クヤバ川を逆行して来られましたが、ちょうど川船の荷物船で12日間かかって私の家にたどりつきました。12日間も、左右に展開する同じような風景を眺めていたこととなります。

○パンタナールに住むものたち○

皆さんに、このパンタナールを紹介したのはほかでもありません。ここが、実は、ブラジルにおける肉用牛生産の基地となっているところです。ブラジル第2の肉用牛生産地で、ブラジルの総頭数の15パーセントを生産している重要な自然放牛地なのです。

肉牛の収容頭数をみると、多いところで1平方キロメートル(100町歩)に約50頭、平均して約8頭

岡山畜産便り 1965.06

となっています。このように多数の牛が放牧されているのは、よい草と水があるからなのです。牛も多く集まっているように、他の動物もいろいろ集まっています。1番有名なのがアメリカ豹(オンサ)です。鱧(ジャカレー)もたくさんいます。河馬、山猫、野鳥のたぐいが、わが世の天国とばかりに棲息しています。水があるから魚が繁殖する、魚が多いから鳥や野獣も多い、とこんな因果関係ですね。

○パンタナールはどんな構造か○

模式図で説明しましょう。

この地域には無数の曲がりくねった川があります。雨季になると上流の森林地帯に降った雨が1度この川に殺到しますが、川は1度に多量の水を運ぶことはできません。そこで降った雨はただちに低湿地に氾濫します。模式図にある砂の地帯までが、雨季に増水したときの水沼の広がりです。小さい川も大きい川も、川の左右はこのような低湿地がずうーと連続しているのです。いわば増水時の安全弁の役をばなしているのです。

乾季には、この図のように一番低いところに水沼があつて、その周辺から草がちょろちょろ生えている湿地があり、だんだんと芝草や小さな雑草の平原に連なっていきます。そして雨季には、雨季の水かさの印となっている砂浜にさらに灌木林へと低い平らな土地が広がっていくのです。この草原の中に、緑なす大きな樹の森林があちこちに点在しています(図の斜線の濃い箇所)。この森林は周辺の疎林とはうって変わった大きな樹木の森です。

このような生活環境を巧みに利用しているのが動物たちです。雨季、乾季によって様相は少し違いますが、樹、草、水それを求めてやってくる鳥、虫、魚の共存社会をねらって野獣がわがもの顔に、わが世の春を謳歌しているわけです。でも、最近はだんだんと野獣の群が減少してきているそうです。毒蛇、猛獣がいてとても入っていけないなんてことは、全くありません。むしろ、自動車がぬかるみにはまってどうにもならなくなる場合が一番困るのです。

○パンタナールは放牧の天地か○

ブラジルの牧場経営者は、放牧経営ならパンタナ

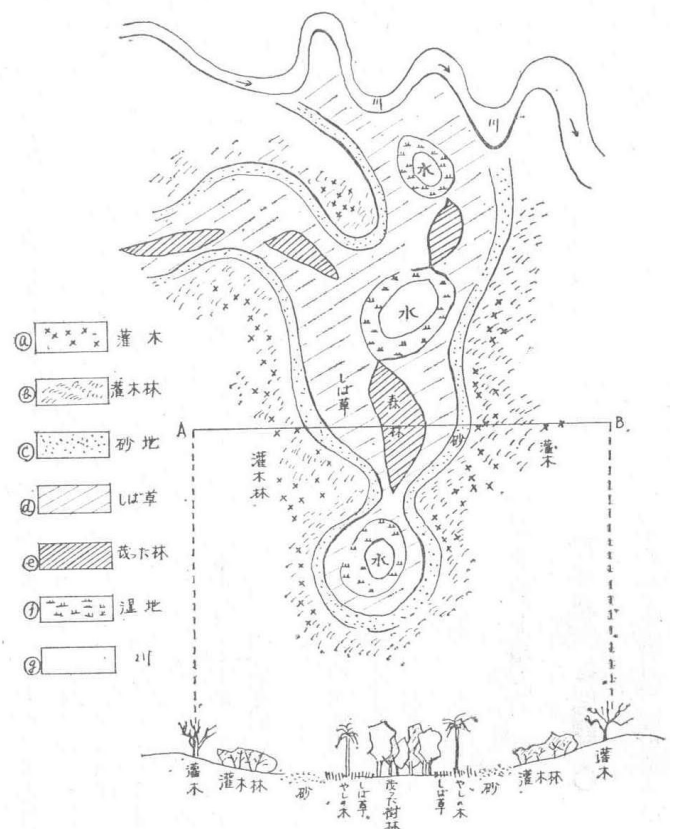
ールだとばかり、古くからこの地方には牧場ができ、この湿地はあますところなくそれぞれの牧場主の土地になっています。つまり、水溜りもなにも牧場主の所有地となっているのです。

最近の彼等の声を聞いてみますと、従来はたいへんよかったが現在では草が少なくなって困った、と感想をもらしています。草が少なくなったのか、牛の頭数が多くなったのか、どちらかですが、私の感じでは牛の放牧頭数が無計画に増やされたものと思っています。

この牧地利用は全くの放任型で、牛の群は彼等の思うがままに移動しております。塩を与えるために1~2ヶ所に集める場合もありますが、牛は必要ときに給塩所に立ち寄るほかは、とにかくすき勝手に生草を喰いつつ放浪の歩をすすめているわけです。

よくある話ですが、雨季に入ったことも知らず、すきほうだいに水溜りの近くの草(主に、1番良質のミモソという草が多く生えています)はうまいもので、ついに喰べるのに日もたつのも忘れていて、さて塩を求めて帰ろうかと周囲を見回すとどこも水、

パンタナール(大湿地)模式図



岡山畜産便り 1965.06

水、水でとても帰れそうにありません、とかくするうち、水はますますそのかさを増し、とうとう水の中に立ち往生して死んでしまったという牛や羊全滅の悲劇があちこちでおこっています。目先の欲はやっぱり出さないことですね。

草生の種類と量にも問題がないことはないのです。このパンタナールの代表的な草はミモソ、カロナ、ダグアの三種です。カロナは丈が高く、乾燥用とすればよいが質が非常に劣ります。最も多いのがダグアで、この草は水生の草です。水の中に生えていて、水が増せばそのかさに応じてつぎつぎと水の上に新しい芽を出していきます。牛はその水の上に出た新芽を喰います。この草は、日本のい草を小さくしたような草で、大きくなると堅くてとても喰べられません。

○パンタナールと放牛経営の問題○

乾季には中心部の水溜り周辺の草を残して、他の草は大部分枯死してしまうが、雨季には水草（ダグア）がこのときとばかり生長を始めます。この2つの状態をみると、草があるといっても良質の草が多量に、いつもあるのではないことがおわかりになったと思います。

どんな草でもあれば牛が飼えるという思い違いが、パンタナール放牧をこの限界で制約しているのです。さらに放牛方式に刈草集飼方式を併せ行えば、もっともっと飼養し得るであろうし、水を乾季のために、貯水することも、放牧経営を安定化させる基本的な改善対策ではないでしょうか。今後に残された多くの問題をもっているのが、このパンタナール牧畜経営ということができます。